

離島留学

里親・親子型

④ 屋久島(鹿児島県屋久島町)——永田小学校ほか

発足二〇周年を迎える 永田小「かめんこ留学」

屋久島町山海留学実行委員会 岩川 俊広



屋久島町：屋久島(504.89km²)と口永良部島(35.77km²)の2島からなる。屋久島は平成5年日本ではじめて世界自然遺産に登録され、同17年には永田浜がラムサール条約湿地に登録された。同28年に周辺海域を含めて、ユネスコエコパークに拡張登録。

● 教育への関心が高い永田地区

屋久島の永田地区(永田集落)は、宮之浦港(みやのうら)の西約二二キロメートルに位置し、人口は約四五〇人です。集落からは、九州で第二位の高さを誇る永田岳を望み、永田川周辺には屋久島では珍しい田園地帯があり、風光明媚な景観が広がっています。ウミガメの産卵地で日本有数の「いなか浜」や「前浜」は、ラムサール条約登録地としても知られ、口永良部島(くつらぶらぶ)付近に沈む夕日は、多くの観光客を癒してくれます。

永田地区には「人の子も 我が子も同じ 永田の子」という言葉があります。永田区(自治会)が主体として運営している「かめんこ留学制度」が二〇年、「永田幼児学級」

(小学校に併設された未就学児対象の保育施設)が五六年続いていることからわかるように、子どもたちの教育に対する校区民の期待と関心が高いへん大きい地域です。

● 二〇年間続いてきた永田小かめんこ留学

永田小学校は創立一四〇年の歴史があり、多くの人材を輩出してきた学校です。昭和三六年の三六二名をピークに児童数が減少しはじめ、複式学級になるほどまでに減りました。

山海留学制度はそうした中、児童数維持や複式学級の解消を目的として生まれました。平成八年度に永田区が主体となって永田小かめんこ留学実施委員会を発足させ、同九年度から留学生の受け入れが始まりました。本委員会の発



かめんこ留学実施委員会主催の留学生交流会の様子。

保に奔走しましたが、発足当初は里親希望者が一人もなく、最終的には実施委員会の役員が引き受ける形でスタートしました。その後、留学生の活動が永田地区内でも広く知られるようになってからは、里親や空家の確保も進み、多い時で一七名、本年度は一〇名の留学生が在籍しています。「かめんこ」とは永田地区の方言で「亀の子」という意味です。永田の浜には毎年多くのウミガメが上陸し、一頭あたり約一〇〇個の卵を産卵します。孵化した子亀は海に帰り大きく成長したのち、やがて産卵のために生まれた浜に帰ってきます。留学生の子どもたちが永田で多くの経験をして、親元に戻った後もいずれ永田に帰ってきてほしいと

足にあたっては、二年ほど前から準備作業に取りかかり、鹿児島県内における山村留学の先進地（当時はまだ離島留学が少なかった）に研修に出向いたり、留学生を募集するにあたっては鹿児島県内の大手新聞社・テレビ局や鹿児島市内の大規模校にて広報活動を行いました。また、永田地区内においては、里親や家族（親子）留学のための空き家の確

いう願いを込めて、かめんこ留学と名づけられたのです。かめんこ留学では、里親留学（ホームステイ、三〜六年生）、孫もどし留学、家族留学（実親と同居、一〜六年生）を実施しています。定員は一二名程度としており、里親留学は里親の人数により決定されます。これまでの二〇年間で北海道から沖縄県まで、延べ二一五名を受け入れてきました。

●地域と「かめんこ」たち

留学生は、一年間という限られた期間で留学しているため目的意識が高く、さまざまな学校活動・地域活動に地元の子どもたちと同様に積極的に参加しています。永田小学校においては、校区内の優れた素材を生かし、ウミガメの保護活動を通じたESD（持続発展教育）に力を入れており、昨年度は環境省主催の第五〇回



ウミガメの保護活動を通じたESDの様子。

全国野生生物保護実績発表会で、これまでのウミガメの保護活動について永田小の六年生が発表を行い、(公財)日本鳥類保護連盟会長賞を受賞しました。また、永田川での手づくりいかだレースや、浜レース(永田浜で行う持久走大会)などの伝統行事もあります。自治会行事として、敬老祝賀会、区民運動会、恵比須様祭り、神社祭りなどがあり、子

ども育成会行事としては、浜清掃、空き瓶回収、鬼火焚き、門回りなどがあります。

留学生生活のはじめは、子どもですから不安定な時期もありますが、留学生は地域の方々から「かめんこ」と呼ばれ、可愛がられる中で、みんなが顔見知りの関係になります。少人数の地域・学校だからこそ、全員が主役になれる環境や、家庭的な雰囲気ですさまざまな経験を得る環境があります。そして、永田地区においては、留学生を迎えることで新しい風が吹き込まれ、周囲に活気が生まれています。さらに、地元の子どもたちも目的意識の高い留学生に感化され、それまで当たり前のように感じていた永田の自然や文化を再認識することができています。家族留学世帯は、PTAや地域コミュニティにおける貴重な人材ともなっています。



いかだレースは永田小の伝統行事となっている。



十五夜祭での相撲の様子。旧暦8月15日の夜に行われる。

● 目には見えにくい大きな成果

この留学制度は、複式学級の解消や児童数の維持を目的として発足しましたが、依然として児童数は減少が続いています。一方で、里親を引き受けてくださる方々も高齢となつて引退されたり、新たな里親となられる家庭も少ないことから、里親留学の体制維持が課題となっています。

永田小かめんこ留学の発足二〇周年を迎えるにあたり、これまでを振り返ると、留学がきっかけで定住につながったケースや、家族留学の助成が受けられる二年間を超えてもなお、卒業するまで永田で学びたいと、地元児童として卒業した子どももいます。これらは目に見える大きな成果ですが、地域に与える活力度や、留学制度を運営することによって育まれてきた地域力も目には見えにくい大きな成果といえると思います。

今年の九月二五日には、「かめんこ留学二〇周年記念」と題して、永田小学校運動会が開催されます。永田小で学んだ留学生OB・OGにも出席をお願いしたところ、学業や仕事、家庭を持たれているにも関わらず、一五名の出席をいただくこととなりました。懐かしい校舎や永田の風景の中、立派に成長した留学生によって、永田地区がまた賑やかになることと思います。

◆行政からみた離島留学◆

■屋久島町(屋久島・口永良部島)の
山海留学と支援体制

屋久島町山海留学実行委員会は、屋久島町教育委員会教育総務課に事務局を置き、1年間の準備期間を経て平成26年度に発足しました。それまで屋久島町内においては、永田小、栗生小、八幡小(以上、屋久島)、金岳小・中(口永良部島)の4校区において留学制度を単独で実施していました。本実行委員会はそれら広報・募集活動を一元的に行うほか、各校区の情報を共有することで円滑に留学制度を運営し、学校や地域の活性化に資することを目的としています。

屋久島町は、多くの離島同様、少子高齢化が進んでおり、離島留学を実施する4校区はとりわけそれが顕著な地域です。学校は地域の文化的象徴であり、学校の活性化は地域の活性化にもつながります。離島留学はその有効的な手段として、平成28年度から離島活性化交付金事業の一つに位置づけられるなど、全国的にも認知されていることと思います。屋久島町においては、それまで町単独で実施していた留学実施事業を、離島活性化交



永田浜から見る夕日。奥に見えるのは口永良部島。

付金を活用し、留学生の保護者に対する助成経費に充てています。助成額は、留学に必要な経費のうち、里親型留学では1人あたり月額3万円、家族(親子)留学では第1子に月額3万円、第2子以降に月額1万円(家族留学は2年間まで)です。

■特色ある地域に支えられて

離島留学を実施する4校区は、屋久島においても特に風光明媚な地域であり、校区ごとに全国に誇れる自然や文化を持っています。各学校においては、その素材を生かした屋久島型ESD(持続発展教育)に取り組んでいるほか、小規模校ならではの全員に目の行き届く指導がなされ、各種学校行事や地域行事においては、留学生を含む意欲ある児童すべてが主役になれる環境があります。

屋久島町における離島留学制度は、発足当初から地域が主体となって組織されたものであり、地域の協力なくしては成り立たないものです。発足当初の里親も高齢化が進み、今後は新たな里親や家族留学向けの住宅の確保など、制度を維持するためにも、引き続き地域の力が必要となります。離島留学がきっかけで屋久島に定住していただいた家族留学の家庭もあります。学校の協力も得ながら、子どもたちの活躍を通じて離島留学への深い理解を得ると同時に、大人となった地元児童・留学児童がまた屋久島に住みたいと思うような、実りある制度運営に努めていきたいと思っています。

(屋久島町 教育長 塩川文博)

岩川俊広 (いわかわ としひろ)

昭和25年屋久島(旧上屋久町)生まれ。進学のため島外へ出るも、子どもたちを郷里の永田小学校へ入学させるために、同57年帰郷、家業の旅旅館・林業に従事。現在は農業を営む。平成8年、永田小かめんこ留学実施委員会発足時のメンバーの一人として、今も運営に携わる。留学生の里親も務める。